別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　加 藤 大 貴

論　文　題　目

擬態語による歩容の記述と生成

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　井手　一郎

委　員　　名古屋大学教授　戸田　智基

委　員　　名古屋大学特任教授　村瀬　　洋

委　員　　名古屋大学准教授　出口　大輔

委　員　　人間環境大学教授　平山　高嗣

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

加藤大貴君提出の学位論文「擬態語による歩容の記述と生成」は，擬態語という直感的な言語表現によって人間の歩行動作の様態である歩容を自動的に記述及び生成することを目的とし，それらを実現するために必要な，擬態語の音韻的特徴を利用して歩容を記述する音韻ベクトルと，歩容を記述した人体部位の座標系列との関係性をモデル化する方法について論じた論文であり，全 5 章より構成されている．

第 1 章では，本研究の背景を述べた後に，擬態語及び歩容の認識・生成に関連する研究を紹介したうえで，本研究の目的と位置づけについて論じている．

第 2 章では，本研究を実施するうえで必要である，人手により擬態語がアノテーションされた歩容データセット（「HOYO」の名称で一般公開）について，その構築方法について論じている．

第 3 章では，擬態語による歩容の記述について論じている．具体的には，擬態語の音韻的特徴を利用して歩容を記述する音韻ベクトルを推定し，次に音韻ベクトルから擬態語を生成する手法を提案している．このような 2 段階の処理により，音韻空間を介することで，既存の擬態語を用いて記述するだけでなく，新奇な擬態語を生成して記述することもできるようになっている．また，新奇な擬態語を生成する場合には，音韻的な自然さを考慮して新奇さの度合を調整している．評価実験を通じて，提案手法は，新奇なものを含めた多様な擬態語を用いて歩容を的確に記述できることを確認している．

第 4 章では，擬態語による歩容モーションの生成について論じている．具体的には，歩容モーションの生成をスタイル変換問題としてとらえ，音韻ベクトルをスタイルとして入力し，歩容モーションを生成するモデルを提案している．提案手法では，まず擬態語を音韻ベクトルとして表現する際に，少数の擬態語をそのまま記述した離散的な音韻ベクトルから，連続的な表現である強調音韻ベクトルに変換する手法を提案している．次に音韻ベクトルから歩容モーションを生成するためのスタイル変換モデルを提案している．評価実験を通じて，提案手法は，既存の擬態語に対応する歩容モーションを生成できることを確認している．

第 5 章では，本研究をまとめ，残された課題を明らかにしている．

以上，加藤大貴君の学位論文は，擬態語という直感的な言語表現がもつ音韻的特徴と人間の動作との間の関係性をモデル化したうえで，相互変換を実現するための新たな方法論を確立し，その有効性を検証している．その成果は，擬態語という特殊な言語表現がもつ音象徴性について，人間の動作と関連付けてモデル化するという独創的かつ先駆的な研究として学術的に寄与するところが大きく，本審査委員会は，論文提出者である加藤大貴君が博士（情報学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定した．